

4 鹿児島県社会教育研究会第49回夏期セミナー記録

令和7年度鹿児島県社会教育研究会第49回夏期セミナー開催要項

1 趣旨

生涯学習社会に対応した、県民一人一人の生きがいと潤いにあふれた活力のある地域づくりを進めるため、県下の社会教育行政関係者等が一堂に会し、社会教育の果たす役割について会員相互の研修を深めるとともに、資質の向上を図る。

2 主催

鹿児島県社会教育研究会

3 共催

鹿児島県教育委員会

4 日時

令和7年8月20日（水） 午前10時15分から午後3時55分まで

5 会場

県立青少年研修センター

6 参加対象者

鹿児島県社会教育研究会会員

7 研究主題

「誰もが幸せや生きがいを感じられる生涯学習・社会教育をめざして」

8 日程

| 時間 | 内容 |
|-------------|--|
| 10:00～10:15 | [受付] |
| 10:15～10:30 | [開会行事] (1) 開会のあいさつ（県社会教育研究会会長） (2) 来賓あいさつ（県教育委員会社会教育課長） (3) 日程説明 |
| 10:30～12:00 | [講演] 【演題】「子どもたちの生きる力を引き出す体験活動」 ～心を揺さぶる体験からウェルビーイングの実現に向けて～ (講師) 福満 博隆 氏 鹿児島大学共通教育センター准教授・鹿児島県キャンプ協会会長 |
| 12:00～13:00 | [休憩] |
| 13:00～14:40 | [事例発表] (司会者) 駿河 純 氏（県教育庁社会教育課社会教育係社会教育主事兼専門員） 【事例発表①】「i（あい）がいっぱいあいさつ運動の推進に向けて」 (事例発表者) 永井 博文 氏（いちき串木野市教育委員会社会教育課長補佐） 【事例発表②】「次代を担う青少年を育成する青少年育成市民会議の取組」 ～サマーベースキャンプ2025の実践を通して～ (事例発表者) 江口 恵彦 氏（鹿屋市教育委員会生涯学習課主幹兼社会教育係長兼指導主事） 事例発表の意見交流、質疑応答、まとめ |
| 14:50～15:40 | [研究テーマに関する研究協議] 研究協議、全体発表、発表のまとめ |
| 15:45～15:55 | [閉会行事] (1) 閉会のあいさつ（県社会教育研究会会長） (2) 事務連絡 |

9 申込方法

別紙申込用紙に必要事項を記入し、メールで事務局へ送付する。申込期限：8月4日（月）

10 その他

- (1) 夏期セミナー終了後、情報交換会を行う。（詳細は申込用紙参照）
- (2) 問合せ 〒891-1305 鹿児島市宮之浦町4226-1
鹿児島県社会教育研究会事務局（県立青少年研修センター内 担当：東）
Tel.099-294-2111 E-mail: ytcken@pref.kagoshima.lg.jp

子どもたちの生きる力を引き出す体験活動 ～心を揺さぶる体験からウェルビーイングの実現に向けて～

鹿児島大学総合教育機構共通教育センター
准教授 福満 博隆

1 はじめに

鹿児島県社会教育研究会の研究テーマ「誰もが幸せや生きがいを感じられる生涯学習・社会教育をめざして」を受けて、この夏期セミナーの意義を考えた時、「参加者が幸せや生きがいを実感できる生涯学習・社会教育のあり方について深く学ぶ機会」と捉えて話をしていきたい。そもそも、ウェルビーイングの概念は、身体的、精神的、社会的に良好な状態にあること、体育の分野では、WHOの定義で、単に病気でないだけではなく、心身ともに満たされ、社会とのつながりも良好な状態を意味する。

ウェルビーイングの実現に向けて、生涯学習・社会教育では何ができるのかについては、生涯学習・社会教育で行ってきた取組とウェルビーイングの実現とのつながりを意識すること、ウェルビーイングの実現に向けて生涯学習・社会教育における取組の質を向上させること、生涯学習・社会教育における体験活動を単に体験で終わらせず、個人の生活や地域社会にどのように生かしていくのかということまで考えたプログラムづくりをしていくことが大切である。

2 なぜ体験活動が必要なのか

(1) 直接体験(生の体験)の減少

生きる力を身に付ける機会が減っていることから自己肯定感が不足している。また、知恵を学ぶ場が足りない。

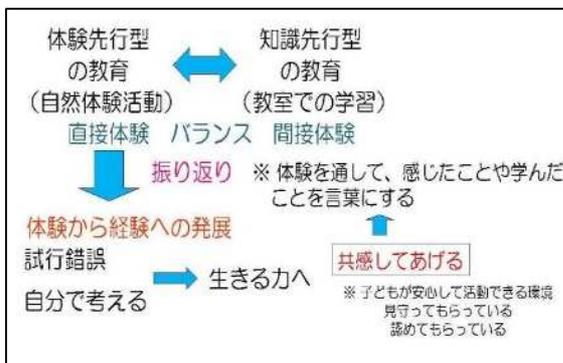
(2) 豊かな感性の喪失

感じ取る力、感じていることを表現する力が失われているとともに、生活の中で五感をフルに使う場面が少なくなっている。共感する力が身に付かない。

(3) 意識調査の結果から

国立青少年教育振興機構の意識調査によると、「私は自分自身に満足している」という質問に、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた割合については、日本は45.8%、韓国は71.5%、米国は86.5%であった。この結果を見ても、日本の若者の「自己肯定感」は低いと言わざるを得ない。

3 「体験」から「経験」に発展させる指導の重要性



「体験」は、固有名詞を伴うことが多い。
「経験」は、抽象名詞を伴うことが多い。

(例) ナイフで木を削った。作品を作った。
→ 刃物は注意しないと危険である。
→ 刃物でいろいろなものが作れる。(価値)
(例) 雪がとけると何になる？
→ 雪がとけると、「水」になる。
→ 雪がとけると、「春」になる。(感性)

体験をさせることが目的ではない。体験を通して学習させることが大切である。体験から経験に発展させるため、体験を振り返り、言語化する中で、次の自分の行動に生かすことがで

きるようにする。指導者は、共感し、何をしたからできた、できなかったかを引き出す言葉掛けをしていく。(指導者の「ソフトスキル」を高める。)

4 「野外活動」「野外教育」「自然体験活動」とは

- (1) 「野外活動」とは、大自然の中で、または大自然を利用して行われる身体活動、知的活動、および情操的・文化芸術的活動を含む諸活動の総称である。
- (2) 「野外教育」とは、野外活動を教材として、教育的働き掛け（意図的）を行う。学習目標（ねらい）や対象に合わせた教育方法がある。
- (3) 「自然体験活動」とは、学習指導要領に出てきた言葉（教育的活動を意味している）。教育行政や社会教育施設、教育団体において使われている。

5 自然体験活動によって学び、引き出される「生きる力」

- (1) 人間（自分）と環境（自然）とのかかわりについて
 - 自然の生態（人間生活の関係）について直接的に学ぶ。
 - 自分を取り巻く生活環境の仕組みや問題点に気付く。
 - 自然に対する豊かな感性を養う。
- (2) 人（自分）と人（他人）との関わりについて
 - 集団における役割分担や責任（主体的な行動から存在感へ発展する）
 - 集団における精神的なストレスの克服（コミュニケーション術を修得する）
 - 集団による問題解決（協力する、合意する）
仲間との成功体験が、喜びの共感につながり、達成感を味わうことができる。
相互理解、相互信頼が生まれ、優しさを感じることができる。
- (3) 自分自身について
 - 成功体験の積み重ねによって自己発達を促す（自己肯定感の充足）
 - 葛藤する場面で認めてもらうことで、自分の可能性に対する発見をし、自信を深めることにつながる。自然環境の中にいる自分や他人の中にいる自分、非日常の中にいる自分を見つめることで、不安が自信に変わる。できなかったとしても、頑張った姿を称賛することが次につながる。
- (4) 豊かな生活のための技術や知恵について
 - 先人の生活の追体験で、人間の知恵や文化を学ぶことができる。
 - 地域の文化や風土に触れることで、地域理解につながる。
 - 楽しく明るい生活を営む能力を身に付けることで、生きる力を高める。
 - 自然体験活動を通して危険を学ぶことで身を守ることを学ぶ。
 - 自然に対する正しい認識をもち、危険を予知し、回避する能力を育てる。



【講演の様子】

6 終わりに

「自然体験活動」では、子どもたちが主体的に関わる中で、野外での不便な生活体験（心を揺さぶるようなわくわくする体験）の中で、できるだけ快適な(楽しい)活動ができるように工夫する力を育てること、困難に挑戦し、喜びや達成感を味わえる力や困難を楽しみながら乗り越えようとする力を育てること、知恵や文化を学び、生きる力、楽しく活動する力を育てること大切である。活動の質を高めるために、現場の指導者が、毎回、子どもたちに何のためにどのような体験をさせるかをしっかりと考えるようにする。

「幸せ」とは、与えられるものでなく、自ら感じ取るものである。体験活動を通じて、子どもたちの「幸せを感じる力」を引き出していくことが、ウェルビーイングの実現につながる。

最後に、この自然体験活動は、防災教育「困難な状況にもかかわらず、しなやかに適応して生き延びる力」の育成にもつながるので、今後取組を進めてもらえればと思う。

i (あい) がいっぱいあいさつ運動の推進に向けて

いちき串木野市教育委員会社会教育課
社会教育課長補佐 永井 博文

1 運動の推進にあたって

(1) 趣旨

本市の教育理念『「認め」「支え」「学び」とともに未来を創る人づくり』を体現するための第一歩として地域社会全体の絆を深め、温かく思いやりに満ちたまちになることを目的として、学校や家庭、地域をはじめ、企業や関係団体等、全市民の協力を得ながらあいさつ運動に取り組み、住む人が互いに尊敬と感謝の気持ちをもった「愛があふれるコミュニティ」を築き、地域全体が未来に向けて成長する明るいまちづくりをめざす。

(2) 背景

コロナ禍による人間関係の希薄化が進む中、市民から地域コミュニティ活動を強化するためにあいさつ運動を進めたいという要望があり、さらに、不審者と思われるため地域住民が児童生徒に声を掛けづらいという雰囲気があった。

(3) 取組ビジョン

ア あいさつの習慣化、他者の尊重、存在を認める意識によって認め合う心を育む。
イ あいさつから始まる信頼関係の構築や困った時にお互いを支え合う地域づくりによって、支え合う地域づくりを目指す。防犯の面でも大きな効果がある。
ウ 異なる世代や立場を超えたコミュニケーションの活性化によって、学び合う姿勢を促進する。

(4) ネーミングについて

全国の市町村名を見ても「いちき串木野市」(ichikikushikinoshi)のように「i」がたくさん付く名前はないことから、「i (あい) がいっぱいあいさつ運動」とした。

2 令和6年度の取組

市内小・中学生を対象に、標語・シンボルマークの募集を行い、のぼり旗(最優秀賞)、ポスター(優秀賞)を制作した。その際、子供の書いた文字や絵をそのまま掲載するように工夫した。そして、子ども会大会で表彰式を行ったり、市の広報誌に掲載(R6、11月号)したりした。のぼり旗・ポスターを、市内幼・小・中・高・特別支援学校、公共施設、まちづくり協議会、郵便局等に設置した。

3 令和7年度の取組

※ いかに当事者意識をもってもらうかを考えながら事業を推進した。

(1) あいさつ運動宣言団体の募集

- ・ 広報誌、商工会議所、ロータリークラブで紹介し、さらに、市校長研修会、市教頭研修会で周知した。また、広報誌であいさつ運動宣言団体の取組紹介を行った。

【あいさつ運動宣言団体(R7.8.8現在)】

1. いちき串木野市役所
2. モンシェリー松下
3. (株)満留建設
4. 川上小学校
5. 高齢者クラブ
6. 生福小学校
7. 日本地下石油備蓄(株)
8. (有)須野瀬設備工業
9. (有)大興建設
10. 社会福祉法人市社会福祉協議会
11. (株)國料建設

(2) あいさつ日の設定

これまで、毎週第3土曜日「青少年育成の日」をあいさつの日と設定していたが、防災無線の放送のみとなり、マンネリ化していた。そこで、市民を巻き込んだ取組にするため、毎月1日と20日の交通安全の日と同日にあいさつの日を設定することにした。

(3) あいさつ運動はじめの一步作戦！

それぞれの分野で目指すあいさつの姿を示した。

家庭…朝起きたら「おはよう」、寝るときは「おやすみなさい」をきちんと声に出して言えるようになろう。

地域…道ですれ違った地域の方々に、笑顔で「おはようございます」「こんにちは」を大きな声で言えるようになろう。

学校…先生や友達はもちろん、学校に来られる方々にも「おはようございます」「こんにちは」を大きな声で言えるようになろう。

職場…毎朝の出勤時に、職員同士で明るく元気に「おはようございます」を言えるようになろう。

市民の代表が集まる生涯学習推進会議、青少年育成市民会議、社会教育委員の会議で、あいさつ運動の意義を説明した。そして、各団体から取組に対する意見を聴取し、それを活動に反映させるようにした。

(4) あいさつをテーマにした市民講座の開設

子供や市民を対象にした「あいさつ教室」「あいさつスキルアップ講座」を生涯学習講座に開設した。右写真は子ども会育成会の指導者が研修を深める少年団体指導者研修会の様子である。



【生涯学習推進会議の様子】

(5) あいさつパートナーシップの構築

市内事業者や関係団体が連携協力しながら、地域全体であいさつ文化を育む仕組みを構築した。



【あいさつ教室の様子】

市内各学校、まちづくり協議会、女性連、PTA、高齢者クラブ、社会福祉協議会、スポーツ協会、文化協会、商工会議所、ロータリークラブ、防犯協会、交通安全協会等

生涯学習大会で先進的な取組を行った団体の事例発表を計画している。

4 成果と課題

【成果】

- ・ のぼり旗・ポスターによる広報活動で、あいさつ運動が認知されつつある。
- ・ 多くの団体があいさつ運動宣言団体に登録している。
- ・ 各種会議を通して、あいさつの大切さが認識されつつある。
- ・ 市役所職員のあいさつがよくなってきている。
- ・ 学校と連携して活動する団体が出てきている。

【課題】

- ・ あいさつの日がまだ浸透していないので、市民の意識をもっと高めていきたい。
- ・ 家庭におけるあいさつの取組を更に充実させていきたい。

次代を担う青少年を育成する青少年育成市民会議の取組 ～サマーベースキャンプ2025の実践を通して～

鹿屋市教育委員会生涯学習課
主幹兼社会教育係長兼指導主事 江口 恵彦

1 鹿屋市の紹介

鹿屋市は鹿児島県の大隅半島の中心に位置し、人口96,648人（小学生約6千人、中学生約3千人、高校生約3千人）、大隅半島の行政、経済、産業の中核都市である。

2 鹿屋市の生涯学習課の主な取組

| 文化振興係 | 生涯学習係 | 文化財センター | 社会教育係 |
|---|--|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・かのやふるさと検定 ・かのや風土記発行 ・戦後80周年関係行事 ・電子図書館「デジタル図書かのや」運用開始 | <ul style="list-style-type: none"> ・鹿屋寺子屋事業 ・デジタル公民館運用に向けた取組 ・生涯学習推進協議会を核とした地域づくりの支援 ☆優良公民館文部科学大臣表彰（13館中10館受賞） | <ul style="list-style-type: none"> ・岡崎古墳群の国指定に向けた取組 ・文化資源を活用した出前授業 | <ul style="list-style-type: none"> ・CSと地域学校協働活動の一体的推進（全校CS） ・地域で支える家庭教育支援事業（一年目） ・空前絶後の「子ども会活性化策」（スーパーコカプロジェクト） ・青少年育成市民会議の機能化と体験活動の充実 |

3 鹿屋市の青少年育成市民会議について

「青少年育成市民会議」とは、地域ぐるみで青少年の健全育成を推進するために、市民が主体となって活動する組織で、行政、学校、PTA、地域住民などが連携し、様々な活動を通じて青少年の成長を支援する役割を担っている。

これまで、話し合いを中心とした年1回の会合を実施していたが、市民の認知度が低かった。この市民会議をより充実させるために取組を進めていくことにした。

4 市民会議のアップデート策1

＜市民会議の目的＞

- 青少年の健全育成に対する市民の関心を高める。
- 健全育成に寄与する機関・団体等の情報交換を行い、連携を深める。
- 市民総ぐるみで次代を担う青少年の健全育成を行う。

【そのために】

市民会議の登録団体（現在33団体）を3グループに分け、年3回の実務者連絡会を実施するようにした。

5 市民会議のアップデート策2

これまで会議を中心に進めてきたが、何か形になるものを行いたいと考え、「デジタルデトックス」「青少年育成」「コミュニケーション」「学校では経験できないこと」「非日常の体験」「他団体・教育機関でやっていないこと」をコンセプトに、「6泊7日」の青少年育成事業「サマーベースキャンプ2025」を実施した。

6 具体的実践1「協力者集め」

指導者は、生涯学習課社会教育係3人、協力者として市民会議登録団体4人、鹿屋市教職員10人で、1泊単位で調整しながら、一日あたり3～5人を配置した。

7 具体的実践2「事業実施の広報」

(1) キャッチコピーの工夫

「スマホもない、YouTubeもない、ゲーム機もない！あるのはかまどと薪と大自然！非日常の七日間であなたもアップデート！」と、印象に残るように工夫した。

(2) 食べ物でアピール

チラシにパンやピザの写真を掲載した。実際に写真を見て「やってみたい」という理由で参加した生徒が複数見られた。

(3) 格安の参加費を設定

小学生10,000円、中高校生11,000円と設定した。

(4) 市民会議団体一覧の掲載

市民会議という組織を市民や登録団体にアピールするため、チラシの下部に鹿屋市青少年育成市民会議登録団体を掲載した。

8 具体的実践3「募集結果と工夫」

定員24人に対し、25人の申込みがあった。募集の工夫として、申込フォームの中に、保護者の想いを書く項目を設けた。その過半数に、こちらがねらいとする内容が書かれていた。

9 具体的実践4「キャンプの実際」

男女で1泊ずつキャンプ泊と室内泊を交互に行った。また、7日間のうち食堂利用は2回（初日の夕食と4日目の夕食）のみで、それ以外の12回はすべて野外炊飯を行った。その中には、子供たちが話し合って考案したメニューも加えた。

「バームクーヘンづくり」「星空観望」「火起こし体験」「キャンプファイヤー」「レクリエーション」本格的な「七宝焼き」等、盛りだくさんの内容を盛り込み、充実したキャンプにすることができた。



【アオハルカレー】



【万滝ハイキング】



【キャンプファイヤー】



【まきまきパン】

10 成果

(1) 「生きる力」の変容を見るために、IKR評定用紙（簡易版）を用いたアンケート調査を実施した。「心理的社会的能力」「徳育的能力」「身体的能力」ともに、得点の伸びが見られた。（「心理的社会的能力」については有意差あり）

(2) 更生保護女性会（市民会議の構成組織）からそうめんの提供をしていただく等、会議の場だけではなく、事業の中で、様々な行政・民間団体・地域・教職員のつながりをつくることができた。

11 終わりに

市内の大人すべてが関係する「青少年育成市民会議」での「サマーベースキャンプ」に、より多くの大人が関わり、子供たちのよりよい成長及び関わる大人の生きがいがづくりの一助とし、鹿屋のウェルビーイングにつなげていきたい。